

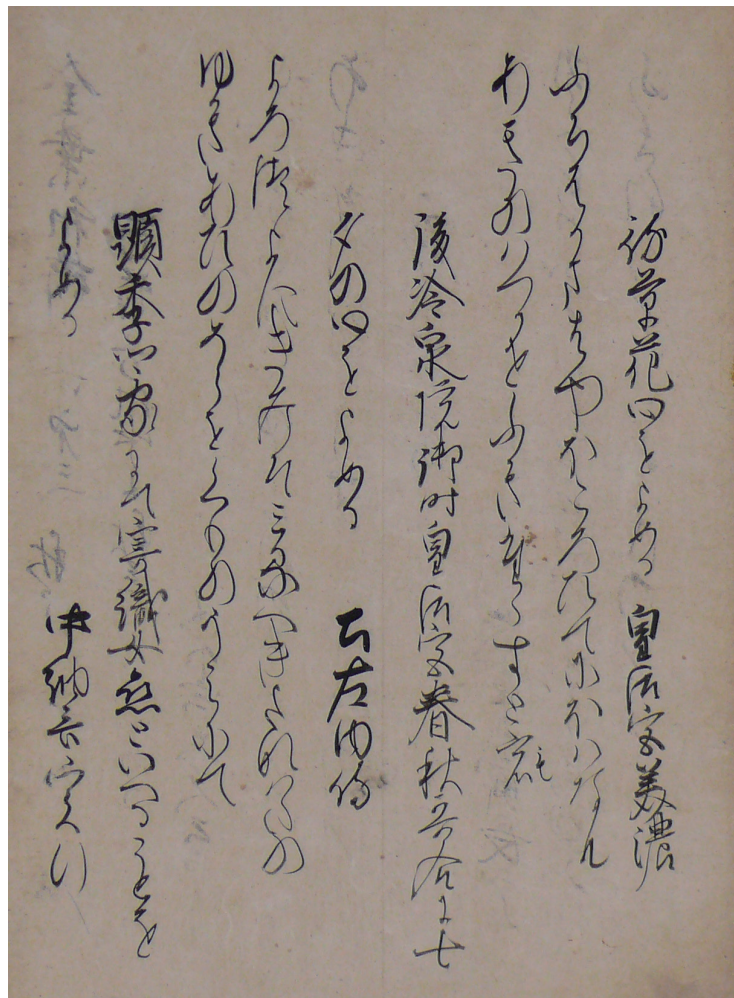
総持学園創立 90 周年

鶴見大学文学部ドキュメンテーション学科設立 10 周年記念

第 138 回 鶴見大学図書館貴重書展

収書の真髓

— 勅撰集に関する古典籍・古筆切を中心に —



2014 年 10 月 22 日 (水) ~ 11 月 15 日 (土)

鶴見大学ドキュメンテーション学会共催

ご挨拶

今年度ドキュメンテーション学科は設立 10 周年を迎えました。

10 年前、過去・現在・未来の情報を扱える学生を育てることを目標に、情報学中心のデジタルドキュメンテーション (DD) コースと古典籍の書誌学を中心とするライブラリーアーカイブ (LA) コースを設けて、本学科はスタートしました。その後、2009 年度入学生からは、より専門性を高めるべく図書館学、情報学、書誌学の 3 つコースに改組して現在に至っています。

書誌学コースでは、鶴見大学図書館の協力のもと、貴重書を利用した授業を学科発足の当初より行っています。江戸時代以前に書写された古典籍を対象とする「古写本演習」と、主に江戸時代に出版された版本を扱う「古版本演習」がその代表的な授業です。そうした実際に貴重書を扱う演習を年間を通じて行っている大学は他にはなく、書誌学コース、ドキュメンテーション学科の大きな特徴の一つとなっています。今回の展示の解題も「古写本演習」を履修する学生が執筆者として参加してくれています。

この 10 年、日本文学科と協力しながら古典籍の収集に努めて参りました。その一端を、これまでに 4 回「見る・読む・比べる ― ドキュメンテーション学科による古典籍へのアプローチ―」と題する貴重書展を開催し、紹介して来ました。中には古活字版の『山谷詩集注』や寛永刊の多色刷「〔御馬印〕」などの優品も少なくありませんでした。近年では古筆切の収集にも力を入れ、昨年度の貴重書展では、『新古今和歌集』の今まで知られていなかった和歌が記された断簡をお披露目することができました (今回の展示にも再度出陳していますので、前回お見逃しの方は是非この機会にご堪能ください)。

「収書の真髄」とは少々言い過ぎの感はありますが、一点一点学問的な見地に立ち、その資料的価値を見極め収集してきました。今回はその中から、勅撰集に関する古典籍と古筆切を中心に紹介します。いずれも貴重な資料ばかりです。ドキュメンテーション学科の 10 年にわたる収書の成果をお楽しみください。

ドキュメンテーション学科
伊倉史人

※ 11 月 1 日 (土) に一部展示替えがあります (10 月 31 日 (金) が作業日です)。

※ 末尾に * を付したものは、本学教員の所蔵品です。

※ 本解題は、伊倉史人・久保木秀夫 (ともにドキュメンテーション学科准教授)、及び本年度の同学科専門科目「古写本演習」の履修生等 13 名によって執筆されました。担当者名は、各解説末尾に明記してあります。

(2014 年 11 月 6 日第 2 稿)

展示リスト

- 1 『古今和歌集』断簡 伝寂蓮筆 鎌倉時代前期写 軸装3幅・卷子改装1軸
- 2 『後拾遺和歌集』断簡 伝寂蓮／慈寛筆 鎌倉時代後期写 各軸装1幅
- 3 『金葉和歌集』玉藻切 伝後鳥羽院筆 鎌倉時代前期写 軸装1幅+マクリ38面分(の一部)
- 4 『新古今和歌集』桂切 伝後京極良経筆 鎌倉時代後期写 軸装1幅
- 5 『林葉和歌集』断簡 伝西行筆 鎌倉時代前期写 軸装1幅
- 6 古筆手鑑 江戸時代製作 折帖1帖(以上、展示ケース大)
- 7 『古今和歌集』顕広切 伝藤原俊成(旧名・顕広)筆 南北朝時代写 マクリ1葉
- 8 『古今和歌集』上 伝津守国冬筆 南北朝時代写 列帖装1帖
- 9 『古今和歌集』残簡 伝藤原為家筆 鎌倉時代後～末期写 元冊子本・卷子改装2軸
- ◎ 10 『後拾遺和歌集』江戸時代初期写 袋綴2冊
- 11 『後拾遺和歌集』残簡 室町時代後期写 元冊子本・卷子改装1軸
- ◎ 12 『金葉和歌集』江戸時代初期写 袋綴1冊
- 13 『詞花和歌集』室町時代後期写 列帖装1帖
- ◎ 14 『新後撰和歌集』下 江戸時代前期写 列帖装1帖
- 15 『新後撰和歌集』江戸時代前期写 列帖装1帖
- ◎ 16 『続千載和歌集』残簡 室町時代中期写 元冊子本・卷子改装1軸
- 17 『新拾遺和歌集』残簡 室町時代後～末期写 元冊子本・卷子改装1軸
- 18 『古今和歌集序鈔(小幡正信注)』正徳2年(1712)義孟筆 袋綴1冊
- 19 『[古今集序註(頓阿序注)]』延宝3年(1675)吉兵衛筆 袋綴1冊
- 20 『古今和歌集注(勸修寺本古今集注)』江戸時代前期写 列帖装8帖
- 21 『古今和歌集秘抄』江戸時代前期写 袋綴2冊
- 22 『仮名寄和歌』江戸時代初期写 袋綴4冊
- 23 『色葉和難集』江戸時代中期写 袋綴5冊
- 24 『松花和歌集』残簡 伝日比正広筆 室町時代後期写 元冊子本・卷子改装1軸
- 25 『元可法師集』残欠本 伝清水谷実秋筆 室町時代初期写 元冊子本・卷子改装1軸
- 26 『永久百首』江戸時代中期写 袋綴1冊

◎ 10/22～10/31のみ展示 ● 11/1～11/15のみ展示

1 『古今和歌集』断簡 伝寂蓮筆 鎌倉時代前期写 軸装3幅・卷子改装1軸

『古今集』は延喜5年(905)、醍醐天皇の命により、紀貫之ら4名の撰者によって撰進された1番目の勅撰集。日本古典文学中、最も評価が高く、後代に最も影響を与えた作品のひとつである。

寂蓮を伝称筆者とする『古今集』の古筆切としては、1面ずつに四周枠線のある右衛門切が著名であるが、当該断簡はそれとは別種。もと列帖装、縦17・8cm×横15・8cmほどの椀形本。現時点で都合23面分の断簡類(模写を含む)を見出している。それらいずれも巻11以降であるので、上下2帖のうちの下帖が分割されたのだろう。

当該断簡が目されるのは、現存する他伝本とは著しく異文を有しているからである。久曾神昇氏編『古今和歌集成立論』(1960年3月～1961年12月、風間書房)で比較してみる限り、当該断簡の本文は、藤原俊成の師、藤原基俊が用いていたとされる基俊本(これ自体すでに散佚しており、ノートルダム清心女子大学附属図書館黒川文庫蔵・樋口光義本に校合されている部分的な本文など、ごく限られた資料によって断片的に知られるのみ)に、最も近似しているようである。が、その一方で、光義本の校合本文とも明確な異同が見出される場合があり、基俊本に関する研究を深めていこうとする上で、存分に活用し得ると期待される重要資料であると言えよう。よって本学でも収集を志しており、現時点において次の6点を所蔵もしくは管理できている。

- ①巻12・恋2・560～563 軸装1幅 *
- ②巻15・恋5・801～802 マクリ1葉
- ③巻15・恋5・807～809 マクリ1葉
- ④巻16・哀傷・巻頭829～830 軸装1幅 *
- ⑤巻19・雑体・1003(長歌)～1004(「具歌」=反歌) ほぼ5面分 軸装1幅
- ⑥巻19・雑体・1006・1005(ともに長歌) ほぼ4面分 卷子改装 (久保木)

2 『後拾遺和歌集』断簡 伝寂蓮/慈寛筆 鎌倉時代後期写 各軸装1幅

『後拾遺集』は白河天皇の命により、藤原通俊が撰者となり、応徳3年(1086)に奉獻した4番目の勅撰集。慈寛を伝称筆者とする1葉は巻5・秋下の巻頭部分、335～337に該当。巻首題には「後拾遺和歌抄第〈秋下〉四首」とあり、「第五」とあるはずの「五」が本来的に書写されていないのが不審。またその下の、同巻の総歌数に関する注記も擦り消されている。一方、寂蓮を伝称筆者とする1葉は、巻10・哀傷・548～550に該当。伝称筆者は異なるものの、当該2葉はツレと認められ、また『古筆学大成』所収「伝寂蓮筆 後拾遺和歌集切(一)」3葉のツレともみられる。ほかに個人旧蔵手鑑『藻塩草』(すでに解体か)所収の1葉、また『公爵島津家藏品入札目録』(1927年5月28日、東京美術倶楽部)に収録される「九二 古筆手鑑」所収の1葉半分、といったツレの存在も知られる。

当該断簡を含む、これら一連のツレには、特に作者に関する動物が少なからず施されている。そのほとんどは陽明文庫蔵・伝藤原為家筆本(建長元年〈1249〉幸王丸の識語あり)の動物と一致しており、かなり近い関係にあるようである。残念なのは、陽明文庫本が下帖を欠く、巻10までの残欠本であると同様、当該断簡もまた、現存するのは巻10まで、となっていることである。今後、巻11以降のツレが出現すれば、それは陽明文庫本の欠を補える貴重な資料となり得るだろう。

なお陽明文庫本の性格については、舟見一哉氏「清輔本・定家本『後拾遺和歌集』の復元試論」(『和歌文学研究』第108号、2014年6月)参照のこと。(久保木)

3 『金葉和歌集』玉藻切 伝後鳥羽院筆 鎌倉時代前期写 軸装1幅+マクリ38面分(の一部)

平安期の勅撰集で、撰者は源俊賴。金は褒美の詞、葉は言の葉の意ですぐれた詞華の集を意味する。十巻という構成の勅撰集は、「金葉和歌集」と「詞花和歌集」しかなく、これは「拾遺抄」にならぬ十巻にしたものだという。成立、大治元1124年に白河法皇の院宣を奉じ、崇徳天皇の大治元1126～2年の間に三度にわたり奏上される。初度本は天治元年末頃、二度本は天治2年4月、三奏本は大治元年～同2年初頃。代表歌人は、俊賴、経信、公実。

(3年 島田美穂)

土浦藩主土屋政直(1641-1722)旧蔵の『金葉和歌集』を、昭和23年(1948)になって分割(もと列帖装)。古

筆了信は後鳥羽院筆と極めるが、もとより真筆ではない。本学図書館には 39 面 96 首分を所蔵する。先行研究によって「玉藻切」は二度本の伝本中であって、初度本にもっとも近い性格の伝本であることが指摘されている。本学所蔵の断簡中は、現存『金葉集』諸本に見えない歌（後の勅撰集入集歌、『散木奇歌集』所収歌、新出歌 6 首等）が多く含まれる。異文も多く、『金葉集』の伝本研究上貴重な資料と言える。（伊倉補）

4 『新古今和歌集』桂切 伝後京極良経筆 鎌倉時代後期写 軸装 1 幅

『新古今集』は、後鳥羽上皇の命により、藤原定家ら 5 人の撰者によって撰進された 8 番目の勅撰集。その完成度は『古今集』と並び評されるほどであり、後世に与えた影響も極めて大きい。元久 2 年(1205)にひとまず竟宴が催されたが、その後も 5 年ほどにわたって激しい切り接ぎ作業が行われており、結果現存伝本の本文にも相当な異同が生じることとなった。

当該断簡は、後京極良経を伝称筆者とするもの。『古筆学大成』によると、1941（昭和 16）年に『新古今集』巻 16・雑上の残欠本が見出され、後京極良経筆と極められた上で、京都是桂の地において分割されたため「桂切」と命名された由であり、いわゆる新名物—近代以降に分割された、固有名の付された古筆切—のひとつである。『古筆学大成』には 9 葉分掲載されている。

当該断簡はその新出の 1 葉で、縦 23.9cm×横 14.3cmの軸装 1 幅、巻 16・1487～1489 に該当。ほかにもツレはまま見出され、中に極めて特異な本文を持つものもあり、今後『新古今集』の伝本・本文調査をしていく上で、少なからず注意を要する資料と言える。なお宮内庁図書寮文庫蔵『新古今集』巻 18・元冊子本（おそらくは列帖装）の卷子改装 1 軸（503 - 230）もツレであろう。

ちなみに伝称筆者は良経であるが、『古今集』石見切や、『拾遺集』実践女子大学図書館山岸文庫本その他の、いわゆる寂恵本と同筆もしくは類筆の可能性はなかろうか？（久保木）

5 『林葉和歌集』断簡 伝西行筆 鎌倉時代前期写 軸装 1 幅

源俊頼男にして、平安時代末期に活躍した歌僧、俊恵の家集『林葉集』の最古写断簡。伝称筆者は西行とされているが、もう一時代ほど下る、鎌倉時代前期頃の書写であろう。縦 16.8cm×横 14.1cmの軸装 1 幅、巻 3・秋・510～513（『新編私家集大成』番号）に該当。

『林葉集』には流布本と異本とがあり、両者の間には相当の歌の出入り等がある。異本は宮内庁書陵部蔵の江戸時代初期写の模写残欠本が天下の孤本であったが、その際に親本とされた古写残欠本を、のちに分割したうちの 1 葉が、すなわち当該断簡なのである。換言すれば書陵部本は、当該断簡がまだ残欠ながらも典籍の状態を保っていた段階で、作成された模写本、だったということである。

なお当該断簡は、久保木秀夫『林葉和歌集 研究と校本』（2007 年 2 月、笠間書院）で「断簡 L」として取り上げた白雨文庫旧蔵品。（久保木）

6 古筆手鑑 江戸時代製作 折帖 1 帖

古筆手鑑とは、さまざまな種類の古筆切や短冊などを貼り集めた、古筆切類のいわばアルバムである。

当該手鑑は、金茶地に唐花唐草瑞鳥文様織り出し綴り表紙、中央に「古筆手鑑」と墨書した雲紙金龍欄紋金野毛砂子散らし題簽あり。縦 39・7cm×横 24・3cm×高さ 13・0cm。全 45 折、オモテ・ウラ合わせて 90 面。3 行の大聖武を筆頭に、古筆切類 144 点・短冊 216 点・色紙 7 点の、合計 367 点を貼付している。

平安時代写の文学関係の古筆切こそ、伝寂然筆大富切『具平親王集』断簡や、伝平業兼筆春日切『師輔集』あたりと少ないものの、古典文学研究の立場からすると相当な重要資料が数多く含まれている。初公開時の昨 2013 年度には、従来まったく知られていなかった『新古今集』の新出異本歌を記載した断簡が、当該手鑑中から発見されたことで、全国的な話題にもなった。今回もその伝寂蓮筆『新古今集』卷子本切の面を中心に展示している。なお鶴見大学図書館ほか編『新古今集の新しい歌が見つかった！』（2014 年 10 月、笠間書院）をも参照のこと。（久保木）

7 『古今和歌集』 顕広切 伝藤原俊成（旧名・顕広）筆 南北朝時代写 マクリ1葉

顕広切は『古今集』の断簡で、『増補新撰古筆名葉集』俊成の項に「顕広切 四半、古今、哥二行物、顕広ト名入ノ切ナリ」と記載されている名物切。当該断簡は縦 23.9cm×横 15.1cm、巻5・秋下・291～293に該当。

俊成真筆の『古今集』昭和切や、自筆の『千載集』日野切と比較して、明らかに別筆であるが、「顕広」が俊成の初名であるため、おそらくは顕広時代の若書きであろう、と従来考えられてきた。また顕広切に記載されている本文が、永暦2年（1161）の俊成本（転写本のみ宮内庁書陵部に存）とほぼ一致していることも、その強力な傍証とされてきた。一方で田中登氏が紹介した「写本名葉集」には「永暦年中顕広と奥書有」とある由である（「古筆切と奥書」、『古筆切の国文学的研究』所収、1997年9月、風間書房）。また『古筆切名物』にも「四半切 古今 永暦年中顕広ト奥書アリ」と見える。うち「永暦年中」は永暦2年本と合致はするが、永暦2年本に「顕広」の署名はないので、その点不審でもあった。

ところが次掲8で紹介しているとおおり、『古今集』伝国冬筆本の奥書群には、④のような永暦元年（1160）俊成本の本奥書が引用されており、しかもそこには「顕広」の署名が明記されているのである。これは顕広切に関する「永暦年中、顕広と奥書有り」という情報と見事に重なり合うものであり、従って、おそらくこの8④の奥書こそが、顕広切にあった奥書だと推断される。言い換えれば、顕広切は、永暦2年本ではなくて、このたび初めて存在が明らかとなった、俊成の永暦元年本（の転写本）を分割したものだった、と考えられるわけである。永暦2年本との間に小異が存しているというのも、たった1年ではあっても、書写する機会が別々だったからであろう。ともあれ今後、顕広切の本文を改めて精査していくことによって、俊成本の生成過程の一端を明らかにすることができるようになるかもしれない。（久保木）

8 『古今和歌集』上 伝津守国冬筆 南北朝時代写 列帖装1帖

『古今集』の上帖（巻1～10）のみが伝わったもので、下帖（巻11～20）を佚した残欠本。金銀砂子・銀切箔・野毛散らしで装飾されたウラ見返しに「津守社家国冬（「琴山」印）という極札が貼付されており、確かに鎌倉時代最末期～南北朝期の書写とみられる。

茶色地に草花や動物（兎か）などを織り出した後補表紙。縦 14.9cm×横 12.0cm。料紙は白の具引き紙。全8括り、墨付き 105 丁（8括り目の一番内側の料紙に1丁分、同一料紙を貼り足している）、遊紙なし。

この上帖では、仮名序→本文→真名序→奥書・識語類、と続いており、あたかも上帖のみで独立していたかのようにも見えるが、後述の奥書・識語中には「古今上下」などとあり、本来は、やはり上下二帖本だったとおぼしい。

本文は未精査ながら、歌の配列・出入りは定家本に等しいようである一方、相応に異同も確認されるようである。また本文中に夥しい勘物が記されており、それらはいわゆる清輔本の勘物や寂恵本の勘物と酷似・類似しているものの、完全には一致していない事例も多くあるようで、今後の詳細な比較検討が必要である。

当該本においてさらに注目されるのは、真名序のあとにまとめられている複数の奥書・識語類である。すなわち、

①保元2年（1157）の清輔本の本奥書（の一部）

②未詳識語（清輔本に関係するか？）

③清輔本所引の藤原通宗識語（の一部）

④永暦元年（1160）の俊成本の本奥書

⑤嘉禄2年（1226）の定家本の本奥書と為家の識語

⑥貞応2年（1223）の定家本に基づく二条為世本を転写し、それによって真名序も追加した本奥書

⑦永仁4年（1296）に、以上の奥書・識語を有した1本を相伝したという某法橋（重ね書きで判読困難、時に73歳だったという）の1本を、円助阿闍梨が相伝したという識語か

なおこれらの奥書・識語類中、④の本奥書などによって、俊成を伝称筆者とする名物切のひとつ「顕広切」が、まさに当該本引くところの、永暦元年俊成本という、これまでまったく知られていなかった1本の断簡であることが明らかになり、大変に有益である。（久保木）

9 『古今和歌集』 残簡 伝藤原為家筆 鎌倉時代後～末期写 元冊子本・卷子改装 2軸

『古今集』全20巻のうち、巻8と巻10との残欠本。元冊子本（おそらくは列帖装）の卷子改装。2軸とも、元茶色地（ただしかなり落剥している）に金糸の菊等文様織り出しの後補表紙。巻8は縦22.5cm×横平均15cm、全長約270cm、15面分。巻10も同寸で、全長は約230cm、13面分。なお両巻とも見返しと本文料紙の間に金もみ箔散らしの補紙があり、また軸巻紙もあり。裏打ちもあり。

収蔵箱には①「古今集 巻物 八ト十ト也／為家卿 正筆」、②「為家公 吟味書 古筆了仲」、③「二条為家卿 古今和歌集二巻」と墨書された紙片3点が収められている。うち②は極札の包み紙とおぼしいが、極札そのものは入っていない。また蓋オモテには「二条為家卿 古今和歌集」、蓋ウラには「八之巻／拾之巻／則式巻／為家卿真筆」という墨書あり。

奥書の類はないが、『古今和歌集成立論』と照らし合わせると、伊達家旧蔵定家筆本と、寂恵本とに近いようである。おそらくは定家本のいずれかを祖本とするものであろう。

朱の声点と合点がまま見出されるほか、本文余白には、墨と朱で後からの書き入れと思われる注記が多く残されている。しかし墨筆はごく一部を残して削り取られ、朱筆も擦れによって解読が難しい状況にある。（4年 塚本真百合）

10 『後拾遺和歌集』 江戸時代初期写 袋綴 2冊

袋綴の上下2冊本。紺色の無地表紙。縦29.4cm×横21.2cm。2冊とも表紙左肩に題箋の剥落痕あり。上冊93丁、下冊103丁。内題「後拾遺和歌抄」。上下は別筆。下冊はノド部分で余白を広く取っているため、ノドに書き込まれた丁付も見える。また下冊末尾に「一校畢、以日野光広卿本又一校、于時寛永十二年菊月下旬」という識語も、さらに別筆のようである。一度校合した本文を、さらに日野光広（烏丸光広、1579～1638）本に基づき、寛永12年（1635）9月（菊月）に再度校合したことが知られる。確かに当該本においては、全巻にわたり、とりわけ下冊において、別筆とおぼしき訂正や他本注記が少なからず見出されるので、それらはこの光広本との校合結果かと思われる。

なお巻12の698～700番歌を書写した面に、705～707番歌の詞書までの貼紙がある。当該本ではそのうちの705歌と706詞書作者名が欠落しているため、前後の本文をも含めた形で、それを補おうとしたのであろうが、1丁前のオモテ面に貼り間違えられている。一方、欠落箇所（705作者名と707歌との間）にも、本来あるべきその本文が書き入れられている。貼り紙とこの書き入れとは、別の人物によるものであろうか。（3年 高橋美鈴）

11 『後拾遺和歌集』 残簡 室町時代後期写 元冊子本・卷子改装 1軸

『後拾遺集』巻18～20途中（1211番歌）の残欠本。虫損痕が左右対称になっている点からも、元冊子本（おそらくは列帖装）だったと推測できるが、現在は卷子本に改装されている。表紙欠。補修あり。1面は縦24.1cm×15.0cm前後で、全69面分。紙背の一部に金箔の縁飾りあり。

紙背の紙継ぎ部分の近くには、第1面から3面分継がれるごとに、漢数字で「一」「二」「三」…と墨書されており、「廿四」まで続く。うち「十八」が抜けているが、それはちょうど巻二十の巻頭に該当しており、確かにその部分の本文は欠落している。また「廿一」と「廿二」とが入れ替わっているが、本文もやはり番号通りに入れ替わっている。要するに紙背の数字に合わせてオモテ側の本文にも錯乱が生じている、ということである。ほかにも錯乱部分があるようであり、なお精査が必要。（3年 簡孝介）

12 『金葉和歌集』 江戸時代初期写 袋綴 1冊

柳茶色布目地布表紙。表紙左肩に「金葉集」と墨書した箔散らし題箋貼付。縦25.8cm×18.5cm。全96丁。料紙は楮紙。字高約24.0cm。保存状態は並だが、少々虫損や汚れがある。蔵書印、朱方印3顆あり。うち1顆は本学図書館のものだが、残り2顆はともに二度擦りされておき、解読が難しい。

44丁の折り目部分には「賀」字があり、確かに同丁ウラ面で巻5・賀部が始まっている。また60丁の折り目部分にも「恋」字があり、同丁ウラ面で巻7・恋部が始まっている。もっともこれは恋部下であり、本来は恋部上の巻

頭部分の折り目にあるべきか。ともあれ賀も恋も、よく詠まれる和歌の主題であるので、分かりやすく目印を付けたものであろうか。

『新編国歌大観』において「異本歌」と扱われている中では、668 番歌（巻1・春・56次）の「春の日のよけき空にふる雪は風にみたるよ花にそ有ける」という1首があった。（3年 島田美穂）

13 『詞花和歌集』 室町時代後期写 列帖装1帖

『詞花集』は、崇徳上皇の院宣により、六条家の藤原頭輔が撰者となった第6勅撰集で、ほぼ天平元年（1151）頃の成立と推定されている。

以下、本学ドキュメンテーション学科2013年度卒業生・岡本望の卒業論文「『詞花和歌集』古写本の調査・研究—鶴見大学図書館本を中心に—」によると、当該本は、縦24.9cm×横17.5cmの列帖装1帖。奥書・識語・極札等存していないが、典籍そのものの姿から、おそらくは室町時代後期の書写と判断される。

『詞花集』の本文は、歌の出入り等によって初度本と精撰本とに大別される。当該本は、精選本系統（二）に大別されるものの、同系統中の国立歴史民俗博物館高松宮本や、天理大学附属天理図書館本などとは必ずしも一致せず、当該本なりの独自性を有している。ただし校合作業は全巻には及んでいないので、今後なお一層の調査が必要である。

（2013年度卒業生 岡本望／本稿執筆は久保木）

14 『新後撰和歌集』下 江戸時代前期写 列帖装1帖

『新後撰集』は、正安3年（1301）、後二条天皇の命により撰進された、13番目の勅撰集である。撰者は二条為世。津守氏の入集歌が多いことから「津守集」とも呼ばれたという。部立は春上下、夏、秋上下、冬、離別、羈旅、釈教、神祇、恋1～6、雑上中下、賀、となっている。

当該本は、巻10一～20を書写した下帖のみの伝本。香色表紙の左肩に「新後撰和歌集下」と墨書した布目地金泥雲霞描題簽貼付。縦23.6cm×横16.2cm。見返しは布目地の斐紙に金泥雲霞草木描。本文料紙も斐紙。全5括り107丁。うち前後に遊紙1丁ずつ。各巻頭丁にはインデックスの役目を果たした金紙が料紙の端に貼付されている。

『新編国歌大観』では、『新後撰集』の異本歌として、1608～1617番歌の10首分を紹介している。うち1612番歌までが、正保4年（1647）刊のいわゆる正保版本記載の異本歌、1613番歌からが、尊経閣文庫本ほかがある異本歌の由。それら異本歌のうち、当該本では1610番歌（1047番歌の次）と1612番歌（1103番歌の次）、1617番歌（1329番歌の次）が見出され、注目される。

ほか865番歌では、「藤原業平」という作者名に対し、「在原」が正しいとする紙片あり（ただし『新編国歌大観』では「藤原業尹」）。ほか82丁表にも「水をくむ」という3句目が「みずつはくむ歟」と指摘した紙片あり。（4年 鈴木佑喜）

15 『新後撰和歌集』 江戸時代前期写 列帖装1帖

当該本は江戸時代前期写の列帖装1帖。朽葉色花唐草文様布表紙。縦24.7cm×横17.7cm。全12括り201丁。うち前遊紙1丁、後遊紙4丁。なお「藤井文庫」の朱方印があり、前見返しに「本書は流布本との相違甚だ多い異本である／寛文頃の書写 藤井記」という紙片が貼付されている、藤井隆氏旧蔵本。

実際、藤井氏の指摘どおり、当該本の本文は相当に特異である。具体的には『新編国歌大観』記載異本歌1608～1617（ちなみに1612までが正保版本、1613からが尊経閣文庫本などの由）のうち、1608番歌は他本同様、789番歌の次、1612番歌は1103番歌の次（ただし大鑑では1104番歌の次）に、1613番歌は549番歌の次、1614番歌は593番歌の次、1617番歌は1329番歌の次の、それぞれ本行部分に書写されている。と同時に、残る1609番歌は923・924番歌の行間に、1610～1611番歌は1047・1048番歌の行間に、1615番歌は669・670番歌の行間に、1616番歌は1221・1222番歌の行間に、細字で補入されている。

ほか『新編国歌大観』478・479番歌が逆順、528～531番歌のうち530～531番歌が528・529番歌の間に位置など、歌順の異同も散見される。今後一層の精査が必要。（4年 今井亮・島田哲弥）

16 『続千載和歌集』残簡 室町時代中期写 元冊子本・卷子改装1軸

『続千載集』は、文保2年(1318)、後二条天皇の命により撰進が開始された、15番目の勅撰集である。『新後撰集』と同じく二条為世が撰者となった。

当該本は伝足利義政筆の室町時代中期写、巻10のみの残欠本である。桐箱入り。列帖装の卷子改装。縦25.3cm×横平均17.8cmの料紙31枚継ぎ。うち31枚目は9.8cmと短い、これは遊紙の左端の一部を軸に巻き込んでいるためである。表紙・見返しは後補。うち見返しには、香色地に金銀泥及び金もみ箔にて雲霞・山などが描かれている。巻末部分、軸直前の遊紙部分に「東山殿義政公真蹟也 筆跡関 古筆了仲(「筆跡関」朱角印)」という奥書極あり。また収蔵箱には「七十九番 続千載和歌集 東山殿(「養□庵所蔵章」朱方印)や、「(□□□□(朱)[東]山殿 [続]千載和歌集 壹」といった貼り紙がある。『新編国歌大観』と較べて、歌の出入りなどはないが、926番歌の四句目は、『大観』の「さはらぬ影」が、当該本では「さはらぬ風」、976番歌の2句目は、「月をやよそに」が「月をよそにや」、1011番歌の5句目は、「道はしりける」が「道はしりにき」となっているように、細部において異同が存在する。ほか1008番歌の2句目「道こそまた」の「た」の横に「も」と傍書されている。(3年 森田久美子)

17 『新拾遺和歌集』残簡 室町時代後～末期写 元冊子本・卷子改装1軸

『新拾遺和歌集』は、後光厳天皇の命を受け、二条為明が撰者となった第19番目の勅撰集である。ただし途中で為明が他界したため、頼阿が後を継ぎ、貞治3年(1364)に成立。全20巻、1920首前後を収める。

当該本は、巻5のみの残欠本。深川鼠色地金泥金切箔散らし後補表紙で、外題はなし。見返しは金銀泥で雲霞が描かれている。表紙は縦27.4cm×横18.3cm。表紙の左下に「大正元年改(「元」のみ手書き朱色、その他は活字印刷)」という貼り紙があり、本来、冊子本であったものを大正元年(1912)に卷子本に改装したものと思われる。料紙は斐紙で、墨付き丁数は25丁、1面行数は14行、字高は22.0cm前後である。本文墨付き料紙の前後には、改装時に付けられたものと思われる補紙がある。奥書類はなし。

本文に関しては、『新編国歌大観』との相違点がいくつかある。『大観』では、「常盤井入道前太政大臣」の「を鹿なく外山のすそのはそばら色に出でてや妻を恋ふらむ」(459番歌)と、「左近大将師良」の「鹿の音ぞ空にきこゆる夕霧のへだつる方や尾上なるらん」(460番歌)とが並んでいるが、当該本ではその間に、「題しらす／六条入道前太政大臣／いほりさすとやまの原のかりねには枕になるゝさをしかの声」という歌が収録されている。その一方で『大観』の巻9には、「六条入道前太政大臣」の「いほりさすは山がはらのかりねには枕になるるさをしかのこゑ」(794番歌)という類歌が収録されている。当該本の完本時、巻九においてその歌がどうなっていたのか、気になるところである。

ほか「よそにみし雲や時雨れて染めつらん紅葉してけり葛城の山」(529番歌)の作者が、『大観』のような「大蔵卿長綱」ではなく、「従三位長綱」となっている、といった異同も存しており、より詳しい調査が必要である。(3年 三浦時紋)

18 『古今和歌集序鈔(小幡正信注)』正徳2年(1712)義孟筆 袋綴1冊

小幡正信による仮名序注。師説(未詳)の他、「為家卿宗尊親王江相傳之古今の注」(古今為家抄)「浄弁聞書」(浄弁注)「慶雲法師為秀卿古今傳授」(未詳)「東野州宗祇へ相傳古今三説」(未詳)「一條禅閣兼良公童蒙抄」(古今集童蒙抄)など多くの古注を引用することで知られる。中でも「兼好法師古今抄」は大坂青山歴史文学博物館蔵伝兼好筆『古今和歌集[注]』に一致することで注目される(但し、現在では兼好の注ではないと考えられている)。片桐洋一氏旧蔵本。

茶色表紙(26.7×19.8糎)。表紙左肩金泥羽毛文様斐紙短冊「古今和歌集序鈔 全」。内題、「古今和歌集 紀貫之撰述」。料紙は朱の四周単辺有界(17.9×13.3cm)の格紙。毎半葉六行、字面高さ約17.8cm。欄外に諸注を引用する。墨付、51丁(但し、最終丁は後表紙見返し)。

巻末に、(a)「右古今集之假名序師傳者／深秘也、為例可授古之傳、綴／其仁者不傳也、雖然雅丈、留／心於歌道、〈予〉知入膏融髓、是／於不情深秘染筆連書寫之、／余時有急行發百里之外、依／之六義迄之注者故人之説、相／加愚之意之趣、畧夾[交] 其余者師／傳而已、書之重可加之也／小幡正信／わするなよいにしへ今の序より／まつつたへてののちのつたへを」(本奥書)(b)「正徳二<壬辰>年十一月一七日／義孟寫之」(書写奥書)(c)「棲仙樓蔵／尾本氏鑒(朱

印) (旧蔵者署名) とある。(b)は書写奥書が本書成立の下限を示し、本文中に引用される「五音相通」という資料に宝永元年(1704)八月三日に正信が書写したとする奥書があって、成立時期を絞り込むことができる。

小幡正信の出自、生没年、経歴、学統などはすべて未詳。正信には『調林拾葉集』(『夫木和歌抄』中の故事由来の和歌の諸注集成。天和3年<1683>、大坂上田兵左衛門、同荻野八郎兵衛刊)があり、その序を堂島の連歌僧西順(1616-1695頃)が、跋を大坂の町医で伝記作者である福住道祐(1625-1689)が執筆しており、かつ跋文中にも「小幡氏正信生浪華ノ英豪而風流ノ称首也」記されていることから、西順や福住道祐と同時期に大坂で活動をした人物と推測される。

伝本は他に岡山藩主池田宗政(1727-1764)の室藤姫が宝暦12年(1762)に書写した岡山大学附属図書館池田文庫蔵本が知られる。(伊倉)

19 『(古今集序注)(頓阿序注)』 延宝3年(1675)吉兵衛筆 袋綴1冊

縹色地万治繫文様艶出表紙(24.3×17.0cm)。外題、内題ともない。料紙、楮紙。毎半葉9行、字面高さ、約21.5cm。墨付き、51丁。奥書「延宝参年四月中旬書之／吉兵衛」。18同様、片桐洋一氏旧蔵本。

叡山文庫蔵本には鶴見大学本他諸本には見られない「此一冊むさと努々他見不可有古今でんじゆの／ともが、まな序のかんじんなり大方の人に／披覧においては天ばつあるべき物とぞ／穴賢々々／頓阿在判」という奥書があり、それによって頓阿(1289-1372)の作とされるが、確証はない。ただし、内容的には頓阿に学んだ了誉(1341-1420)の注釈書に通じるところがあり、頓阿作の可能性は残る。頓阿は兼好らとならび、二条為世(1250-1338、定家の曾孫)門の和歌四天王の一人。(伊倉)

20 『古今和歌集注(勸修寺本古今集注)』 江戸時代前期写 列帖装8帖

金泥霞引銀泥草花下絵布目地表紙(24.0×18.2cm)。表紙左肩金泥霞引短冊「古今和歌集注一序分(二<春二／夏三>・三<秋四五／冬六>・四<賀七離別八／羈旅九物名十>・五<恋十一／十二／十三>・六<恋十四／十五／哀傷十六>・七<雜十七／十八>・八<雜体十九／大哥所御哥二中>)」。見返し、草花文様等艶出金紙。内題、「古今和歌集注卷一／序分」「古今和歌集卷第一<春上聞書>」「古今和歌集卷第二(～二十)」。遊紙、第1冊前1丁・後5丁、第2冊前1丁・後4丁、第3冊前1丁・後3丁、第4冊前1丁・後3丁、第5冊前1丁・後4丁、第6冊前1丁・後4丁、第7冊前1丁・後3丁、第8冊前1丁・後4丁。料紙、斐紙。毎半葉10行、字面高さ、約19.4cm。墨付き、第1冊3折40丁、第2冊3折41丁、第3冊3折30丁、第4冊3折28丁、第5冊3折37丁、第6冊3折38丁、第7冊3折36丁、第8冊3折48丁。朱合点、朱声点あり。奥書はない。

最初に発見された伝本が、京都大学文学部古文書室(国史学研究室)の勸修寺(京都東山真言宗山階派総本山)文書中の『古今和歌集注』(江戸前期写)であったことから「勸修寺本古今集注」と呼ばれている(現在では鶴見大学本の他、九州大学附属図書館音無文庫蔵本が知られる)。

『毘沙門堂本古今集注』を参照しつつ、顕昭説を多く取り入れる点が特徴。真観(1203-1276、葉室光俊)を「先師」と呼び、また真観も撰者の一人であった『続古今和歌集』所収歌を多く引用することから、真観周辺の人物によって著された注釈書と考えられている。二条流や冷泉流の説を伝える注釈書・伝授書が多い中であって、異なる立場のグループの説を伝えるものとして貴重な資料である。

なお、鶴見大学本は装丁も美しい漆箱入の嫁入り本であるが、こうしたある意味マイナーな古今注を嫁入り本に仕立てた点は珍しい。(伊倉)

21 『古今和歌集秘抄』 江戸時代前期写 袋綴2冊

縹色地小菊文様艶出表紙(27.2×18.9cm)。表紙左肩「古今和歌集秘抄上<一二>(下<三四五>)」。遊紙、各冊前1丁。料紙、楮紙。毎半葉13行。字面高さ、約20.8cm。墨付、上冊34丁、下冊42丁。「小竹／園(森繁夫)」「博章蔵(浜口博章)」の印記があり。外題に『古今和歌集秘抄』とあるが、上冊に『古今和歌集序大概秘決』(1丁のみ、未詳の仮序注の冒頭部分)、『序注秘伝切紙』(延五記・亮恵)と『秘抄』の歌注を取め、下冊には『古今伝授切紙口伝条々』

(宗祇)『古今灌頂唯授一子之大事』と『秘抄』の仮名序注を収録する。

『古今和歌集秘抄』は一条兼良(1402-1481)による『古今集』の注釈書。兼良は晩年『古今集』の注釈作業に精力を傾け、『秘抄』は改稿を重ねられて数種類の異本が存在する。本書はそのうち文明10年(1478)2月に成立した系統の伝本(他に学習院大学図書館蔵本、武井和人氏蔵本が知られる)。(伊倉)

22 『仮名寄和歌』 江戸時代初期写 袋綴4冊

鎌倉時代成立の歌学書に『色葉和難集』がある。難解な歌語と例歌を取り上げ、注を施した作品。その『色葉和難集』の初稿本とされているのが、この『仮名寄和歌』で、天下の孤本。成立時期も、初稿本・再稿本ともに未詳。ただし、初稿本では藤原家隆を「壬生二品禪門」としているため、少なくとも家隆が出家した嘉禎2年(1236)12月以降の成立か。

黄土色雷紋繫ぎ文様表紙、縦25・8cm×横20・0cm。袋綴4冊本。料紙は楮紙・外題・内題ともないが、小口に「仮名寄和歌一(～四止)」と墨書されている。表紙の中央部分が他の部分と比較して色が褪せていないので、本来はここに題簽が貼られていたと推測できる。実際、剥落した題簽のうち、巻2・4の分は典籍中に挟み込まれる形で保存されている。巻2の方には「四巻之内ちよりなまで」とあり、巻4の題簽には「四巻之内あよりすまで」とある。一方、歌語目録(一覧)がいろは順に並べられているので、剥落した巻1の題簽には「四巻之内いよりとまで」、巻3の題簽には「四巻之内らよりてまで」のようにあったと推測できる。

再稿本とされている『色葉和難集』との違いについて、すべての比較はできてはいないが、『色葉和難集』が「いなほせ鳥」から始まっているのに対し、当該『仮名寄和歌』には「いなほせ鳥」がなく、「いたつき」から始まっている。またそれとは逆に、『仮名寄和歌』にある歌が『色葉和難集』にはない、という事例も確認できるようである。(3年 代田僚太郎)

23 『色葉和難集』 江戸時代中期写 袋綴5冊

別名「色葉和難」「色葉和難抄」「色葉和歌難集」。22『仮名寄和歌』の再稿本と位置づけられている。

袋綴5冊本。縹色地に有職文様型押し表紙。縦26.8cm×横19.0cm。表紙中央に「和難集一二(～九十終)」と墨書した雲紙題簽貼付。見返しは本文共紙、一部に書き損じの反故紙が混ざる。本文料紙は楮紙。内題「色葉和難集巻一(～十)」。丁数は1冊目が74丁、2冊目が72丁、3冊目が59丁、4冊目が69丁、5冊目が52丁、となっている。各冊「夢庵文庫」「千祥文庫」「中野蔵書」の朱方印があり、中野幸一氏旧蔵本だったと知られる。

冒頭「和歌は我国の風俗なり」という序文に始まり、歌題目録を挟んで、本文部分は歌語・歌・注という順で書かれている。歌語は「いなほせ鳥」から「すたく」まで、いろは順に671項目を掲載している。また、1巻ごとに歌題目録が存在するが、目録と本文との掲載順が必ずしも一致するとは限らず、いくつか順序の違いが見られる。(3年 梅原竜斗)

24 『松花和歌集』 残簡 伝日比正広筆 室町時代後期写 元冊子本・卷子改装1軸

『松花集』は元徳3年(1331)頃に成立した私撰集である。撰者は未詳、浄弁が編纂に関与か。完全な形で現存していないため、全体像は推測にとどまる。

当該本は、元冊子本の卷子改装。胡桃色青海波文様裂表紙。外題なし。縦26.9cm×横24.6cm。見返しは金銀砂子による雲霞描。本文料紙は、縦26.9×横20.2cmの楮紙20枚接ぎ。最後の2枚は白紙。保存状態は比較的良いが、表紙、巻緒に痛みがみられる。表紙は改装時のものと考えられる。

「松花和歌集巻第六」の内題を持ち、料紙1枚に12行、和歌は1首1行で書写、字高は約22.9cm。奥書なし。ただし6～8枚目は別筆か。また錯簡・脱落がみられる(『新編国歌大観』解題、また福田秀一氏「松花和歌集巻六以下の零本(紹介と翻刻)」〈『国文学研究資料館紀要』9号、1983年〉に言及あり)。

当該本には桐箱が付属している。桐箱の蓋オモテに「伝正広筆松花和歌集零本」、蓋ウラに「昭和乙未歳(1955年)臯月晦日/久曾神昇」という記述があり、旧蔵者は久曾神昇氏と知られる。また箱書から伝称筆者は正広と知られる。

当該本及び『松花集』国文学研究資料館本には、ともに奥書類は見出せないが、料紙の寸法、字高、筆蹟もほぼ一致するため、福田氏はこの2点がツレであると判断している。(4年 高橋裕美)

25 『元可法師集』 残欠本 伝清水谷実秋筆 室町時代初期写 元冊子本・卷子改装1軸

元可法師（俗名薬師寺公義）は、南北朝時代の武家歌人。その家集『元可法師集』は従来、島原図書館松平文庫本（313首）や、群書類従本（314首）など、江戸時代以降に書写もしくは刊行された、同類の伝本数本があるのみだった。ところがここに、従来まったくその存在を知られていなかった、清水谷実秋を伝称筆者とする室町時代初期写の1本が新出し、本学図書館に収蔵された。

以下、本学ドキュメンテーション学科2011年度卒業生・小林則仁の卒業論文「鶴見大学図書館蔵『元可法師集』の書誌学的研究」による。当該本は、縦23.0cm×横19.4cmの元袋綴本の20丁分を卷子本に改装したもの。内題「詠三百首和哥」。その左斜め下には文字の擦り消し痕が視認されるが、他伝本には「沙弥元可」という詠者名が明記されているところであるので、さほど有名とは言えない元可以外の歌人の作品に、当該本を見せかけようとした、後人によるさかしらであろう。

当該本に関して惜しむらくは、虫損がやや多いことと、何より料紙の脱落がある、完本ならぬ残欠本であるということである。途中と末尾に、合わせて108首分、11丁ほどの脱落が推定されるという。その点極めて残念である。

ただし一方、当該本には、90～91番歌（新編私家集大成番号）の間に、松平文庫本ほかいずれの伝本にも見られない、宗匠〈為定卿〉家に名所哥よみ侍し時夏鶴河瀬夏禊（ママ）

さてもなをみる月をよとめとや／瀬をせく水にみうきしつらん

という1首が存しているともいう。またその他、既存の伝本との間には、少なからぬ本文異同も確認されるところでもあるので、たとえ残欠本であっても、当該本の資料的価値は極めて高いと言えそうである。

（2011年度卒業生 小林則仁／本稿執筆は久保木）

26 『永久百首』 江戸時代中期写 袋綴1冊

巻首題・帙題には「百首和歌」とのみあるが、一般に『永久百首』と呼ばれる作品。永久4年（1116）12月2日披講か。

当該本は帙入りの袋綴1冊本。帙の題簽は一度剥落したあと、新たに帙の左肩に「百首和歌」という題簽があらためて貼付されている。青鈍色松葉散し文様の原表紙。縦26・5cm×横18・9cm。少々の汚れと虫損とがあるが、保存状態は並である。目録部分の右上に「芙蓉館蔵書」、右下に「紅梅文庫」（前田善子）の朱方印あり。全100丁。うち墨付き丁の前後に遊紙が1丁ずつあり。本文と同筆の他本注記少々あり。

最終丁に「以勅本奉書写校合訖慶長五年仲夏中澣 玄旨」という本奥書があり、これによって慶長5年（1600）5月中旬に、玄旨（細川幽斎）が、禁裏文庫本を転写していたことが知られる。当該本は、その玄旨本からの派生本だろう。ところでこれとまったく同じ奥書が、『細川家永青文庫叢刊 歌合集』所収の歌合伝本等に見出される。よって当該本についても、それら歌合伝本と同時期に転写された1本（の、おそらくはさらなる転写本）と認められよう。ちなみにこの際の親本となった禁裏文庫本は、万治4年（1661）の禁裏火災によって燃えてなくなってしまった。また玄旨本も現存不明。よってこの玄旨奥書本を通じて、焼失した禁裏文庫本なり、玄旨本なりの、おおよその本文を知ることができるようになる。『永久百首』伝本研究の側において、この奥書自体は従来から知られていたが、禁裏文庫本研究の側においては、これまでまったく認知されてこなかったものである。今後同研究を進めていく上で、少なからず有益である。ただし転写を重ねているためだろう、本文のところどころに不備や錯乱もあるようである。

（3年 橋本朋美）